

水土里レポート 投稿様式

投稿月日	平成28年5月26日
タイトル	「くわい」の出前授業をしたよ！
水土里レポーター名	水土里ネット福山 佐々田 愛

平成28年5月10日（火）福山市立新涯小学校5年生約140名が、新涯小学校図書室で出前授業を受けました。

新涯小学校5年生は、地域の特産物である「くわい」について、くわい農家の方から出前授業で学んだり、農家のほ場でくわい植付け体験をしたり、校庭にあるミニ田んぼで「くわい」を栽培し収穫した「くわい」を使った調理実習をする学習に取り組んでおられます。

先日は、第1弾として福山くわい出荷組合の元組合長であり、水土里ネット福山の枝廣義春理事から農家の方の生の声をお聞きする出前授業をされました。



とても大きな声で元気一杯のあいさつです！

みんな真剣な表情で話を聞いています！

出前授業の主な内容

- ・くわいは、約1,000年前中国から伝来し、福山市では120年前に福山城のお堀に植えられたと伝えられている。新涯町では約70年前から本格的に栽培がはじまった。
- ・当時は寒さが厳しく、収穫も洗浄も手作業だったため非常に厳しい作業だった。
- ・米からの転作が勧められ「くわい」の栽培が徐々に増えていき、約60年前にくわい出荷組合ができた。約50年前に本格的な共同出荷が始まり、19年前に埼玉県を抜いて生産量が日本一になった。
- ・くわいの種類は、青くわい、白くわい、吹田くわいの3種類で、福山は青くわい。
- ・植付けする「くわい」は、前年の収穫時に取っておいて冷蔵庫で保管しておき、6月下旬の植付前に冷蔵庫から出すとすぐにくわいから芽と根が伸びてくる。
- ・くわいは、1,000本に1本くらいの割合で白い花を咲かせる。この花から実もなって、その種からくわいを栽培することもできる。
- ・収穫は11月からで、毎年11月13日が初出荷となっている。福山市農協の川口グリーンセンターで、紅白の幕を張って初出荷を盛大に行っている。出荷の最終は12月22日頃で、くわいの出荷は1ヶ月半ほどである。
- ・主な出荷先は、大阪、京都、福岡、東京で、東京より西が多い。生産量は約200トン、生産農家は約50軒。
- ・くわいは、焼酎やスープ、お菓子に加工して売られるようになった。
- ・くわいの収穫の時は、まず茎を刈り取る。それから、ポンプで水圧をかけて掘る。水圧ポンプを使って収穫するようになり収穫作業が3～5倍速くなった。今は、レンコンを収穫する機械のノズルを改良してくわい用にしている。

パネルを使って「くわい」の葉や花の様子、収穫の様子を説明されました。「くわい」の根がどこから生えてくるかというクイズでは、玉ねぎのように「くわい」の底から生えてくると思う子が一番多かったのですが、実際は芽の途中から生えてくると聞き、驚きの声があがっていました。

また、枝廣理事より、くわいを栽培するには水が一番大切で、農業用水の利水調整をしている水土里ネット福山を紹介していただき、新涯小学校の近くの農地まで計画的に農業用水が取水配水されていることをホワイトボードに書いて説明しました。



説明の後、子ども達から質問がありました。

- Q くわいを作って一番大変なことはなんですか？
A 冬の寒さです。水の中に入って作業をすること
Q くわいを作ってうれしかったことはなんですか？
A くわいは、収益が大きく大変励みになります。
Q 今の時期に気を付けることはなんですか？
A 土作りが大切です。草が生えないように耕運機をかけます。



最後は、子ども達から元気な声で感謝の気持ちが伝えられ、大きな拍手で枝廣さんの退室を見送られました。

今年度も新涯小学校近くのほ場でくわいの植付け体験をし、学校の校庭のミニたんぼへ植付け、収穫といった昔ながらの手作業による「くわい」栽培の農業体験をすることとなります。

水土里ネット福山では、本年度も福山市の特産物である「くわい」の魅力を子ども達の農業体験を通じて全国に発信してまいります。